

手斧などを使った木の器の材料はシラカバを多く見る。我が家にもシラカバはたくさん生えているが、器づくりのためにシラカバを切ってしまうわけにはいかないと思っていいたら、お隣からチェーンソーの音が聞こえてきた。大風が吹いた時に倒れると危険なシラカバの上部を切るとのこと。ここでも神様は「やってみなさい」と言ってくれていると解釈し、切り終わった頃に訪ねてみた。結構まっすぐで節の少ないところをいくつか切ってもらうことができたので、さっそくつくってみることにした。

生木は確かに削りやすい。手斧も結構食い込むし鉛筆の先を削る時のように手斧をスライスさせても気持ちよく削れる。比較的細い枝を削って三十五センチメートルくらいの長いスプーンともしゃもじともつかないものをつくってみたが、自分でもここまでできるとは思っていなかった。何だか楽しくなってきた。次は、もう少し大きめのボールのような器ができないかと欲もでてくる。お隣からもらってきたシラカバの幹の部分は直径二十センチメートルほどありイメージした器をトライするにはちょうど良いと思った。ここからは、せっかくなので製作工程を詳しく書いてみたい。とはいっても動画配信サイトのつまみ食いでもやり始めて三ヶ月に満たない素人で、まったくいい加減なものではある。それでも、誰かこの木を削って器をつくることの面白さに興味を持たれたらぜひ試していただきたいという思いで書かせていただく。

まず、当たり前だが出来上がるもののイメージを描く必要がある。円形なのか四角なのか、浅いのか深いのかなど大まかな形をイメージする。細かなところまで考えても良いのだけれど、最初はその通りにできるものでもない。削っては手にして眺めてここをもう少し削りたいとか、自分の手や目の感覚をとおして自分がつくりたいものが何なのかに近づいていく。そういうアプローチが良いと思うし、実際そうすることで自分が納得する形になってくるのが面白く感じるのだ。

おおまかな形のイメージができれば、それに近い塊をつくっていくのだが、その時に私がびっくりしたのは器の凹みを彫っていくのは年輪の中心を掘り下げるのではなく、木の表面から掘り下げるのだという。確かに木の年輪の中心は徐々に水を吸い上げる機能はなくなり死んだ組織として硬くなっていくのに対して、成長をつづける表面は柔らかく割れにくい柔らかさがある。その柔らかい表面から掘り下げるのだそうだ。そうするためには、まず木の表面を整える必要がある。木の皮を残すのもあると思うが乾燥して剥げ落ちやすいので一番外側は削っておく。それから、表面から必要な器の深さのところまで割る必要がある。私は割る場所を決めたらそこにナタをあて、自分で作った棍棒で叩いて割っている。まっすぐ均等に成長していれば良いがそうでなければ斜めに割れることがあるのであまりギリギリを狙わないほうが良いかもしれない。それから、器の幅に合わせて前後左右を切り落としていくのだが、その前に掘り下げる部分の大きさと縁の厚さを決めなければならない。

